

【奨励賞】

団体名	萩大島漁協
活動の内容（概要）	定置網の仕組みを知るとともに、実際に中学生が揚網を体験する萩大島ならではの「漁業体験学習」や、女性部と保護者の指導の下、児童生徒が魚を捌き、調理や萩大島の郷土料理づくりを行う「海の幸体験学習」を実施することを通して、萩大島を誇りに思い、萩大島の未来を創る人材の育成に取り組んでいる。

受賞理由

- 非都市部における人口減少や、高校進学等を契機とした人口の社会減に関心が集まる今日、全国に発信したい取組である。「地域が人を育て人が地域をつくる」好事例である。
- キャリア教育としての価値と併せ、若者の魚離れの中での日本の魚文化を守る取組としても価値がある。25年の歴史もあり、より広がってもいい取組。食育、小中一貫教育という点でも地域実情に合っている。体験談で終わらせず、6次産業やビジネス学習などの展開も期待できる。
- 海という最大の資源を小学校1年生から中学校3年生までの9年間の学びに取り入れ、豊かな体験と深い学びになっている。25年前から島の子供たちのために体験と学びを創り、次世代育成とまちの活性化につなげていることは、他の地域でも実現可能な具体的なヒントになる好事例である。
- 地域性に特化した、正しくふるさとを支える人材を育成するキャリア教育である。今後、キャリア教育を推進する上において、地域の特性・実態・課題にマッチしたキャリア教育の推進は、最重要観点となる。そのような観点から、本実践はキャリア教育地方版ベイシックプランともいえる。
- 地域の状況に応じた取組。漁業に加えて未来創造人の取組も知りたい。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

萩市立大島小中学校、萩市教育委員会、山口大学教職大学院

【行政や地域・社会、産業界等】

萩市立大島小中学校PTA、萩市役所大島支所、萩農林水産事務所、海洋建設（岡山県倉敷市）、道の駅/シーマート、萩市役所水産課

活動開始の経緯

【活動開始時期】平成6年～ 【継続年数】25年

現在は「漁業体験学習・海の幸体験学習」を実施しているが、始めた当時は「海の幸体験学習」のみであった。漁協女性部（当時は婦人部）が子どもたちに「魚の捌き方や調理の仕方を伝えたい」と学校に提案し、まずは家庭科の調理実習の一環（現在は特色ある学校行事）として開始した。その後、漁から体験する漁業学習を加え、現在の形態に至る。



<海の幸体験学習で指導を受け、魚を捌く様子>

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

山口県萩市は、平成17年度より各学校を特色ある教育活動推進拠点校（コア・スクール）に設定し、創意と活力に満ちた学校づくりを推進している。大島小中学校は一昨年度まで「漁業学習」、昨年度は「漁業・農業学習」の拠点校として、特色ある教育活動を展開しており、中学3年次に「地元基幹産業の活性化に向けた提言を行う」ということを目標に学びを深めてきた。（今年度からは「小中一貫教育」の拠点校として、地域に根ざしたキャリア教育の推進を継続している。）

「漁業学習」における様々な取組の中でも、特に「漁業体験学習・海の幸体験学習」は、漁協と学校を中心に地域の皆様の協力を得て、体験学習を実施することにより、地域漁業の復興及び活性化そして、後継者の育成をねらっている。

中学生は、出漁前に水氷（みずごおり）を作る。その後、中学生は大敷網の名切丸で出漁し、定置網の仕組みを知るとともに揚網を手伝う。小学5年生以上の児童生徒は、他の漁船に乗り込み、定置網漁の様子を間近で見学する。その間、小学1年生から4年生までは水産事務所の方が準備された別メニューの体験学習に取り組む。今年度はシェルナースについて学び、実際に使う貝に絵を描く作業を行った。次に中学生による水揚げを見学。全児童生徒で魚の仕分け作業を行い、小学5年生以上の児童生徒は漁協女性部や保護者のご指導の下、水揚げした魚を捌いた。小学4年生以下の児童はヒラメの中間育成場を見学。最後に全員で萩大島伝統の角寿司をつくり、会食した。



<定置網での揚網作業を手伝う中学2,3年生の様子>

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

「漁業体験学習・海の幸体験学習」は、地域の願いや想いを反映した取組であり、毎年話し合いを重ねながら学習内容を検討、改善しながら4半世紀にも渡って続いている萩大島の伝統的な学校・地域連携カリキュラムのひとつである。また、萩大島の自然を生かした体験活動を通して、萩大島の豊かな海の幸に感謝し、実感を伴ってふるさとへのよさを知るとともに、食育の推進にもなっている。この行事を通じて児童生徒の中に着実にふるさとへの愛着と誇りが醸成されてきた。

関係者で活動後の振り返りアンケートを共有し、次年度に向けて改善を図ったり、「他者に働きかける力（関わる力）」「自己の役割の理解（主体性）」「課題発見、計画立案、実行力（見通す力）」「学ぶこと、働くことの意義や役割の理解（学びに向かう意欲）」など、キャリア教育で身に付けさせたい資質・能力が醸成されているかを把握したりしている。

また、今年度から漁業関係者と学校職員との打ち合わせ会に中学3年生が参加し、企画段階から彼らの具体的な意見を活動に取り入れたり、開閉会式の司会進行を中学3年生が務めたりすることにより、児童生徒がこれまで以上にこの体験学習のねらいを理解し、主体的に活動に取り組むことができた。加えて、中学3年生にとっては、行事を自ら企画する意識がより一層高まった。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

萩市立大島小中学校は、今年度から小中一貫教育校としてスタートするにあたり、学校教育目標「ふるさと大島に誇りをもち、志をもってたくましく生きる児童生徒の育成」を目指し、9年間の全教育課程をキャリア教育の視点から捉え直し、「萩大島の未来を創る人材を育てる」ことを目標に掲げた「萩大島ふるさと創造科」を構想した。特別活動、生活科、総合的な学習の時間を核とし、教科横断的な学びの実現を目指している。

本キャリア教育で目指す児童生徒の具体的な姿は「自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりしながら周囲と力を合わせて行動しようとする姿」「自分の興味関心や長所などを把握するよう努め、自分がすべきことに自ら取り組む姿」「見通しをもって物事を進めたり、課題を克服するために自ら行動をしたりする姿」「将来の目標に向かって、今の生活を振り返り、よりよくするために工夫して生活する姿」である。「漁業体験学習・海の幸体験学習」においても、こうした姿を目指している。

「主体性」「関わる力」「粘り強さ」「よりよくするためのアイディア」「ふるさと大島の恵みについて感じたり考えたりしたこと」「ふるさと大島の魅力について」「ふるさと大島学習で生かしたいこと」について記述する振り返りシートを体験前に配布し、体験学習で身に付けたい資質・能力を児童生徒自身が意識して臨むことができるようにしている。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

児童生徒たちは、漁を体験したり、見学したりすることで、父親を含む漁師さんたちの苦労や仕事の大変さ、多くの魚を引き揚げたときの喜びや達成感など多くのことを感じ、学んでいる。また、獲れた魚を実際に調理し、食べることで、命のありがたさを感じる貴重な学びの場にもなっている。

さらに、地域の方々や保護者の支援を得て行う漁船への乗船、揚網、魚の調理などの体験学習の最後に、児童生徒、保護者、地域の方々、学校関係者などの参加者全員で、児童生徒のつくった刺身や角寿司と地域の方々で作られた料理とを一緒にいただく時間を設定しているので、学校と地域のつながりを強める大変有意義な機会にもなっている。

当初、家庭科の授業で行っていたこの体験学習は現在、学校行事として年間計画に位置付けられ、学校の担当者と共に、毎年計画的に、改善を重ねながら実践することができている。また、体験学習のようすをローカルテレビや学校だより等で島内の全家庭に発信しており、25年間続く菟大島地域の特色ある伝統的な学校行事として地域全体に広く認知されている。近年、島外からも視察・参加されるなど、この体験学習に興味を抱く方々も増えている。

学校現場の評価・感想・コメント

菟大島の子ども達にとって、海や山に囲まれた環境は、豊かな生活の場であるとともに、島での生き方や自らの将来を考え、学ぶ学習の場である。その中で、これまで多くの先輩方によって引き継がれてきたのが、「漁業体験学習・海の幸体験学習」であるが、改めてキャリア教育の視点でこれらの取組を捉え直したことで、児童生徒の主体性が、これまで以上に高まってきた。培われた主体性は、「ふるさと大島学習」にも継承され、児童生徒は自分の考えや見通しをもって熱心な活動を続けている。

(菟市立大島小中学校 校長 横沼潤一)

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

- ・菟市大島で小学生、中学生の漁業体験。定置網の名切丸に乗って水揚げのお手伝いやその後の魚の選別、そして実際に瀬つきあじやケンサキイカを捌いて調理しました。子どもや先生、地域の方は総勢120名。中学生が小学生に、地域の人たちが子どもたちにと、獲れた魚を中心に色々な場面で教えあったり、助け合ったりする光景が印象的でした。小学校1年生から毎年1回、中学校卒業までに9回経験します。この経験は大きい。大人にも定置網の勉強になりました。〈道の駅/菟しーまーと（ふるさと菟食品協同組合）facebook より〉
- ・他の地域では「当たり前」ではないことが、「当たり前」に行われている様子がうかがわれました。今後はどの学校にも、その地域ならではのオリジナルなカリキュラムが求められるようになります。9か年の子どもの育ちや学びを学校と地域が共有していくための手立てとしてカリキュラムが

必要となるのです。大島ならではのものが作成され、他地域へ広がっていくことを期待しています。(山口大学教職大学院 教授)